

ジャンヌ・ダルク — ジャンヌと炎

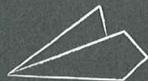
旅役者の一行が伝説の少女ジャンヌ・ダルクの物語を語り始める。

時代は600年前のフランス。豊かで美しい国だったフランスは、国王が後継者を残さずに亡くなったことをきっかけに、巨大な権力と富を手に入れようとするあらゆる人間たちの介入により、戦争と貧困に巻き込まれていく。そして続くペストの蔓延。人々は(子どもたちも)いがみ合い、土地は廃墟と化すなかで、疲れ果てた人間たちはいつ来るとも知らない奇跡を待つよりなかった。

羊飼いの娘ジャンヌ・ダルクは、神の声に従い皇太子シャルル7世に謁見、騎士として軍隊を率いて数々の戦いに勝利していく。しかし、フランスを死から救う人々の心を掴んだにもかかわらず、ジャンヌは政治の犠牲となり“魔女”の烙印を押され、火刑に処せられることになる。

「私の声が聞こえますか—」、苦悶しながらも、自らの内に聞こえた声を否定することを拒否し、炎に包まれるジャンヌの“信念”は、伝説となって人々のなかに生き続ける。

「すべての人々は、たとえ小さくても、心に炎を燃やしている」
日本の若者のために作品を書き下ろした作家、
マテイ・ヴィスニユックの言葉です。



東京演劇集団 風

〒164-0003 東京都中野区東中野1-2-4
Tel.03-3363-3261 (r) / Fax.03-3363-3265
URL: <http://www.kaze-net.org/>

.....E-Mail: info@kaze-net.org

シリーズ《始まりの本》より

《価格は税別》

この道、一方通行

ベンヤミン 「幸福とは、恐れることなく自分を見つめうる、ということである」。エロスと歴史の絡まりあった一本道に刻んだ断章群。思想家のスタイルを築き上げた代表作、瑞々しい新訳。細見和之訳 ¥3000



望郷と海

石原吉郎 シベリアでの8年の収容所体験と帰国後の戦後日本に著者は何をみたか。罪とは、自己とは、〈告発しない〉とは。フランクフル『夜と霧』と並び生きる意味を求めた魂の書。 ¥3000



みすず書房 <http://www.msz.co.jp> 113-0033 東京文京本郷 5-32-21 tel.03-3814-0131 fax 03-3818-6435

ジャンヌ・ダルク — ジャンヌと炎

Jeanne d'Arc JEANNE ET LE FEU



作：マテイ・ヴィスニユック
Matéi Visniec 訳：志賀重仁
演出：浅野佳成
上演台本：ペトル・ヴトカレウ
Petru Vutcărau

観劇の手引き

いま、ひとりの少女が声をあげた

後援：在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本



INSTITUT
FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ日本
JAPON

ジャンヌ・ダルク — ジャンヌと炎

Jeanne d'Arc JEANNE ET LE FEU

いま、ひとりの少女が声をあげた —

作：マテイ・ヴィスニユク Matéi Visniec 訳：志賀重仁

演出：浅野佳成

上演台本：ペトル・ヴトカレウ Petru Vutcărau

舞台美術・衣裳：ステラ・ヴェレブチュアヌ Stela Verebceanu

照明：坂野貢也 音響：渡辺雄亮 舞台監督：佐田剛久

演出助手：江原早哉香 企画制作：佐藤春江

※ 放浪役者の一行 ※

白根有子 …… ジャンヌ・ダルク

栗山友彦 …… アンセラン・コク(シャルル7世の道化)
ピエール・コーション(ボーヴェの司教)

田中賢一 …… 語り手 ほか

佐藤勇太 …… デュラン・ラクサール(ジャンヌの従兄弟)
伝令

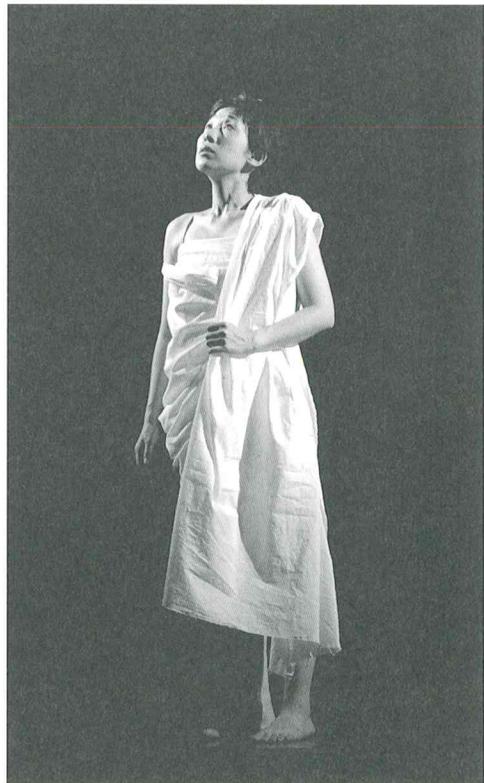
田中 悟 …… シャルル7世(王太子・国王) / 死者

車 宗洸 …… 死体泥棒
ベッドフォード公爵(イギリスの摂政)

瘡師光一郎 …… ジャン・ド・リュクサンブール伯爵
死刑執行人(ジョフロワ・テラージュ)

木村奈津子 …… ヨランド・ダラゴン(シャルルの後の母)
ユニコーン

工藤順子 …… 召使い / イザボー王妃(シャルルの母)
オーヴィエット(ジャンヌの幼なじみ)



声を聞く人たちとともに

白根有子(ジャンヌ・ダルク役)

私がまだ幼かった頃、空を眺めては、あの雲の上には自分の知らない世界があるのではないかと思っていたことがある。初めて足を踏み入れた藪は何か秘密めいた予感がして、もしかしたらそこは小人たちの住む世界ではないかという期待や、早く通り過ぎなければ何かと出会ってしまうのではないかという恐怖があった。

しかしいつしかそんなことは気にならなくなった。天使も、小人たちも、火を吐く龍も、すべては空想の産物で、「必要のないもの」と無意識のうちに教えられるからだ。そして「もっと現実を見て生きなくて」と優しく諭される時、目前にする広大な砂漠のような世界。それまで私の人生を神秘的に、美しく描き出していた世界はここまでで、とかくノウハウと応用でただ生きるという「現実」に、深い幻滅と虚脱感を味わいながら立ちすくむ。

『ジャンヌ・ダルク — ジャンヌと炎』はひとりの少女の声の物語だ。

自分の国を愛し、信じ続けたひとりの少女。彼女の愛したもうひとつの世界 — 天使たちやユニコーンと戯れた世界は、侮辱され、利用され、吐き捨てられ、「根も葉もないペテン」と片付けられる。彼女は「魂が死んでもなお生きるか」という裁判にかけられる。

「私の声が聞こえますか —」

読み書きもできない少女が発した声、それは今にも抹殺されかけている何千、何億のジャンヌ・ダルクたちの声なのかもしれない。

そして物語のなかで彼女の声を聞く者は、社会を、人間を、戦争を、権力を嘲笑する宮廷の道化たちと、半信半疑のうちに『ジャンヌ・ダルク』に巻き込まれ、「伝説」として彼女の勇気を語り継ぐことになる語り手たちだ。

私はこの舞台を通して、若い人たちの〈声〉に向き合っていきたい。そして彼らの声に日々、耳を傾け、そのかすかな声を拾おうと苦悩し、彼らの美しい世界に出会いたいと願っている「声を聞く人たち」とともに、彼ら一人一人の勇気の物語を信じ、語り続けたい。

私が幼かった頃、いつも隣り合わせにあったもうひとつの世界は、そこに再び姿を現すのだろう。